

二月十八日(木)

〈文学部 文学科〉

平成二十八年年度 金沢学院大学 入学試験問題（一般入試日期）

# 国語

## （注意事項）

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから13ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

## （解答上の注意）

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10
----

と表示のある問いに対して

④と解答する時は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

（例）

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

第1問 次の文章は、二〇一三年に書かれたものである。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

「最近、高校生や大学生の前で「豊かな社会になって気楽になるところか、豊かさを守るために結構しんどくなる」と語ることにしている」と友人に話したことがある。その話を聞いた友人は、『鏡の国のアリス』に登場する赤の女王が語ったように、「同じ場所にとどまるためには、絶えず全力で走っていなければならない」のかな、私たちの社会の若者は……」という感想めいたことを述べた。

ア 赤の女王の言葉は、原文では次のようになっている。

*It takes all the running you can do, to keep in the same place.*

成熟した経済において「拡大させようとする力」と「縮小させようとする力」がせめぎ合ってあたかも静止しているように見える定常状態(stationary state)を説明するのに、走っても、走っても、前に進めないランニングマシンの比喻をこれまで用いてきたので、友人の感想が何だかとても嬉しかった。

しかし、右の友人のような感想の方がまれである。「今の日本経済のどこが豊かなのか！あるのは①デイトイだけではないか！」「政府日銀の経済政策のふがいなさを若者の責任に押し付けるつもりか！」と激しい反論が返ってくる。そうした②テンケイ的な反応に出くわすと、口に出して言うかどうかは別として、私の頭の中には次のような再反論がすでに用意されている。

世界の国々の経済を比較する場合、①大国の基準は人口五〇〇〇万人以上、②豊かさの基準は一人当たりの名目GDPが二万ドル以上、が目安とされる。日本経済は、バブル経済といわれた八〇年代後半に二つの基準を満たして、米国とほぼ同じ時期に「豊かな大国」となった。現在でも、右の二つの基準を同時に満たす「豊かな大国」は、日米に加えて独、仏、英、伊、韓国の七カ国にすぎない。

確かに「失われた二〇年」と呼ばれた九〇年代、二一世紀初頭の一〇年間、日本経済の成長は③ドンカした。(a)、日本のGDPは、株価や地価のように暴落することなく、「豊かな大国」として高水準を維持してきた。

日本経済が停止状態(経済成長が失われた状態)に陥ったのではなく、走り続けて、やっと同位置にとどまることができる定常状態にあると、私としては考えたいのである。

少子高齢化、厳しい国際競争、技術の新旧交代の結果、ベルトがどんどん加速していくランニングマシンにあって、その場にとどまろうと思えば、全速力で走り続けなくてはならない。走るのをやめれば、たちまち、マシンに弾き飛ばされてしまう。成熟した日本経済において豊かさを守

り続けるとは、一人一人がこのような競争に向き合うことではないだろうか。

そんな状況で競争する辛さは、前に進む程度で自分の成長を確かめることができないことである。時には、走っても、走っても、前に進むことができない<sup>④</sup>。シヨウソウから、成長できていないように見える理由を外部の要因に求める誘惑に駆られることがあるかもしれない。

しかし、外からみれば、その場に立ち止まっているように見えても、走り続けている人間の心肺機能は向上し、脂肪が徐々に筋肉に置き換わっていく。一人一人が、自分自身の内部で起きている<sup>⑤</sup>。シンチン代謝を見つめていけば、成長を確実に確認することができるであろう。

私が若い人に向けて語ってみたのは、今の日本の状況で豊かさを守っていくことは、競争から逃げるわけでもなく、成長をあきらめるわけでもないという点である。逆に、今の日本の状況で生き抜くということは、個々人が真摯に競争に向き合って、個人の成長を成し遂げていくことなのだと思う。

( b )、辛いことばかりでもない。どのように競えばよいのか、先輩から教わることも多い。同輩と切磋琢磨して走り続けることは案外に楽しい。そうやって競争で培ってきたことを後輩に伝えることにも、必ずや意味を見出せるであろう。利己主義の代名詞のように受け止められている<sup>(イ)</sup>「競争」も、<sup>(ウ)</sup>「切磋琢磨」する人間関係や師弟関係と考えれば、前方に違う風景をながめられるであろう。

ベルトの回転速度が速すぎるのは、もしかすると政府の失政に起因するのかもしれない。しかし、政府が「ベルトの回転を止めることができる」と言えば、それは嘘である。仮に、個人がベルトの速度を遅くしたいと考えれば、経済の流れから遅れることを覚悟して、自らの意思でベルトの速度を遅めに設定することになるろう。

( c ) 仮に、ベルトを停止させて立ち止まりたいと考えれば、経済の流れから 

X
---

 ことを覚悟の上で、やはり自らの意思でランニングマシンのスイッチを、しばらくの間、オフにすることもあるかもしれない。いずれにしても、ランニングマシンのベルトの上でどのように走るのかは、結局は自分で決めることなのだと思う。

(齊藤誠「ランニングマシーンで走る辛さと楽しさ」による。出題にあたり、一部改変した。)

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んで答えよ。

解答番号は 1 ～ 5。

① テイタイ 1

① 一家のアンタイを祈願する。

② 与党に対し野党がダイタイ案を出す。

③ 公衆の面前でシュウタイをさらす。

④ 税金の支払いをエンタイする。

⑤ 心を込めてお客をカンタイする。

② テンケイ 2

① 上品でテンガな女性が現れる。

② 学生の作文をテンサクする。

③ 日本経済の将来をテンボウする。

④ 突然でびっくりギョウテンする。

⑤ 病原体がゆつくりとテンイする。

③ ドンカ 3

① 食堂でテンドンを注文する。

② 秋の天候はドンテンばかりである。

③ 大学でドンヨクに知識を吸収する。

④ 武力で他国の領土をヘイドンする。

⑤ ドンジウな痛みが体に伝わる。

④ ショウソウ 4

① ショウリョに駆られて席を立った。

② 事件は社会にショウゲキを与えた。

③ 裁判所にソショウを起こした。

④ 東京にオリンピックをショウチした。

⑤ 緊急事態で委員をショウシュウした。

⑤ シンチン 5

① 政府の反乱軍をチンアツする。

② 山海のチンミをおいしく食す。

③ 作文ではチンブな表現を避ける。

④ 液体に不純物がチンデンする。

⑤ チンシヤク料の安い土地を探す。

問2 空欄（ a ）（ b ）（ c ）に入る接続詞として最も適当なものを、次の①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選んで答えよ。

解答番号は（ a ） 6、（ b ） 7、（ c ） 8。

- ① たとえは      ② ところで      ③ また      ④ しかし      ⑤ ただ      ⑥ しかも

問3 傍線部(ア)「赤の女王の言葉」とあるが、ここでの文脈から「赤の女王の言葉」が示している意味を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。解答番号は 9。

- ① ランニングマシンの比喻と同じように、豊かな社会の若者が辛い状態にあることを意味している。
- ② ランニングマシンの比喻と同じように、成熟した経済が定常状態にあることをたとえている。
- ③ ランニングマシンの比喻よりもの確に、日本経済が徐々に加速していることをたとえている。
- ④ ランニングマシンの比喻よりもの確に、日本経済の成長が失われた状態にあることを意味している。
- ⑤ ランニングマシンの比喻とは違った角度から、経済が高水準を維持していることを説明している。

問4 傍線部(イ)「競争」と(ウ)「切磋琢磨」との関係を、筆者はどのように考えているか。本文の文脈を踏まえた上で、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。解答番号は 10。

- ① 経済は「競争」ではやつと同位置にとどまることができると定常状態だが、「切磋琢磨」であれば成長できる。
- ② 「競争」で走り続けると前方に風景は見えないが、「切磋琢磨」で走り続けると前方に風景をながめられる。
- ③ 「競争」と「切磋琢磨」とは似て非なるもので、利己主義の代名詞である「競争」よりも「切磋琢磨」が好ましい。
- ④ 利己主義的な「競争」は辛いが、先輩から教わったり同輩と「切磋琢磨」したりして「競争」するのは楽しい。
- ⑤ 先輩から教わる師弟関係を「競争」は意味しているが、「切磋琢磨」は同輩とお互い競い合う人間関係である。

問5 本文の空欄 X に入る最も適当と思われる語句を、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。解答番号は 11。

- ① 同じように遅れてしまう
- ② 先を越してしまふ
- ③ 待ちぶせされてしまふ
- ④ 待ちぼうけになる
- ⑤ おいてきぼりにされる

問6 本文全体を読んで、次のA～Fのそれぞれについて、この文章の内容に合致するものに①、合致しないものに②をマークせよ。

解答番号はA 〓 12、B 〓 13、C 〓 14、D 〓 15、E 〓 16、F 〓 17。

- A “失われた二〇年”と呼ばれた時代には日本のGDPは高水準を維持してきたが、実際の日本経済の成長は現状維持であった。
- B 日本経済が停止状態ではなく定常状態にあることを説明するのに、筆者はランニングマシンの比喩をこれまで用いてきた。
- C 日本経済が成長できていないように見える理由を外部の要因に求める誘惑に駆られるが、原因は日本社会の内部に存在する。
- D 今の日本の状況で豊かさを守っていくことは、競争から逃げるのではなく成長を続けるために加速を続けなければならない。
- E 成熟した日本経済において豊かさを守り続け生き抜くには、個々人が競争に向き合い成長を成し遂げていくことが大事である。
- F 今の豊かな日本の状況では個々人が真摯に競争に向き合うことは辛いことなので、時には自分で競争を休むことも大事である。

## 第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

「私」と「田上さん」は同じ会社の女性社員である。おっとりとした「田上さん」は、中途採用されて五年目の事務職員で、有能だが、男性社員からは軽く見られがちな立場にある。「田上さん」の仕事の仕方に、「私」は、たくらみがあるように感じている。

私は、人間としての田上さんには好意を持っているけれども、会社員としての田上さんには、ときどき悪魔じみたものを感じる。片手にペンを持って静かにデスクに待機し、作業を頼みに来る哀れな社員を裁く。相手が、大声を出したり、くどくどと嫌味を言ったり、無言で舌打ちするような輩であつても、田上さんはまったく怯まず、書類を黒い箱に隠しては、相手がいらついてくる時間帯、胃酸が分泌され、こめかみが震えだす時刻にこそ内線をかけ、書類を取りに来させる。田上さんは、言葉でも表情でもチンジョウでもなく、仕事そのもので、腹の立つ相手に一撃を加える。

見ているはらはらすることもある。何年ぶりかの新入社員である河谷君が、ものすごく急いでいる様子で、悪辣な期限を切りながら田上さんのデスクに結構な量の書類を投げ出していったときなどには。私は指を付きつけて指摘したくなった。今日のアんたは終わったよ、まず余裕を持って先方を訪問することはできないし、かといって遅れる破目になって諦めることすら許されない、ぎりぎり間に合ってしまう時刻に会社を出て、焦りで心臓に負担をかけながら、息せき切つて地下鉄の階段を上る事になるだろう。礼儀知らずだったせいで、寿命が何時間か縮んだな。

間に合うのは間に合うと思うんですけどもお、難しいですねー、という田上さんの声が聞こえて、これはかなり怒っているな、と私は判断した。

河谷君は、もう約束しちゃったんで、などと墓穴を掘っている。そんな自分の事情を話したところで物事が動くと考えるのは間違っている。もしあなたが望む首尾通りに物事が運んだとしても、それはあなたが望んだからではなく、周囲が仕方なくそれに合わせたからだ。勘違いしてはいけない。自分で処理しない限りは、あなたに望む力など存在しない。

河谷君が去った後、田上さんは例のノートを参照し、マグカップからお茶を飲んで、一つ小さな溜め息をつき、いきなり河谷君の書類を黒い箱にしまった。田上さんが、まったく手をつけずに書類をしまうのは異例のことである。最高潮に怒っている、と私は田上さんの無表情から受け取る。私は、のちのちに河谷君が焦りに焦る様子を思い浮かべて、かわいそうにと思いつつも、心のどこかでほくそ笑む。そうやって仕事の作法というものを学んでゆくが良い。

田上さんはそれから、まったく河谷君の書類には手をつけず、べつの仕事を始めた。たぶん、田上さんが自分の中で設定した締め切りは、河谷君

の言った期限の一分前だろうから、当分はやり始めないだろう。」「――」。

そうやって私が（エ）卑しい悦びにひたっていたところ、いつもとは違う手順が訪れたのだった。河谷君が戻ってきたのだ。田上さんは顔も上げず、黙々と別の作業に没頭している最中を装う。社内には長くいると、足音と気配で誰がやってくるかわかるようになるものなので、田上さんもきつと、河谷君がフロアに来たことには気が付いているだろう。

あの、と河谷君は、一向に自分を感知した様子を見せない田上さんのデスクに、のそのそと近付く。まさか早くしろとか言うんじゃないだろうな、と私は仕事の手を止めて、河谷君の動向を探る。すみません、と河谷君は馬鹿正直に田上さんの反応を待つ。年輩の社員が、この会社の女子社員はみんな耳が悪いんじゃないかと愚痴っていたことを思い出す。それは間違っている。あの、だとか、この書類さ、などと自分を呼びつける相手には反応しないだけだ。声さえ出せば相手が振り向くと思いついでいる連中には。

「田上さん、無理な期限を言つてすみません。さっきは余裕がない態度で申し訳なかつたです。できるだけ手伝います。私の方で記入できるところはします。」

その言葉に（オ）呆けたのは、田上さんではなく、その状況を観察していた私だった。田上さんはゆっくりと顔を挙げて、ちよつと待って、と言いながらマグカップからお茶を啜り、鷹揚に立ち上がって黒い箱を開ける。私は固唾を飲んで、田上さんの様子を見守る。

「じゃあこのページのこのことここ、たぶん河谷さんでも書けるんで、お願いします。わからないことがあったら訊いてください。」

田上さんは静かに言いながら、河谷君に一枚の紙をわたす。そして、残りの河谷君の書類を再び黒い箱には戻さず、自分の手元に置いて書き始めた。河谷君は、なんとかがんばります、終わったらすぐに持ってきます。と分けられた書類を手に、早足でエレベーターへと消えていった。

田上さんは、少しの間だけ手を止めて、何とも言えない悲しそうな目をして、それでいて少しだけ笑っているように口角を上げて、エレベーターの扉を眺め、また仕事に戻る。私は、（カ）何か二人ともに取り残されたような気分になつて、自分の仕事――地図を見てその場所の来歴の解説文を作つたり、他の人が作った文を校正したりする仕事――にも上の空で、かなり長い時間を無駄に過ごした。

（津村記久子「ブラックボックス」『とにかくうちに帰ります』による）

（注）例のノート……田上さんが作業の際、個人的に何かを書きとめているらしいノート



問3 傍線部(イ)「自分で処理しない限りは、あなたに望む力など存在しない」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 自分で仕事の過程をすべてこなす覚悟がなければ、満足するに足る結果をあなたは手にはできない。
- ② 仕事に必要な書類をすべて自分で整えなければ、あなたは思い通りに周囲を支配することはできない。
- ③ 自分の落ち度を認め、人一倍働いて失敗を挽回しなければ、あなたの期待するように物事は運ばない。
- ④ 自分の望むやり方で物事が遂行されるためには、あなたは自ら率先して動きださなくてはならない。
- ⑤ 自分の望むように物事を運びたいければ、周囲がそう動くよう、あなた自身で対処しなくてはならない。

問4 空欄「        」に入る文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① さまをみるというものだ
- ② 自業自得である
- ③ それもやむを得まい
- ④ 藪蛇である
- ⑤ 田上さんには田上さんのやり方がある

問5 傍線部(エ)「卑しい悦びにひたっていた」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 23。

- ① 新入社員の河谷君が、田上さんの怒りを買うという失態をしでかしたことを、「私」は気の毒に思いつつも胸がすくと思っていたこと。
- ② 新人で人間関係に無知な河谷君が、他の社員同様、田上さんの裁きを受けたことを、「私」は他人事として面白がっていたということ。
- ③ 男性社員として態度が大きい河谷君が、田上さんからたしなめられたことに、「私」は溜飲が下がるような思いでいたということ。
- ④ 今後河谷君が田上さんから受けることになるであろう仕打ちを、「私」は予測し、それが過酷なものであるよう期待していたこと。
- ⑤ 新入社員の河谷君が、今後大切なものを学ぶとしても、今はひどく傷つくであろうことを「私」は確信し、面白がっていたこと。

問6 傍線部(カ)「何か一人ともに取り残されたような気分になって」とあるが、このときの「私」の心情説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 河谷君が謝り、田上さんがそれを受け入れるという展開の中で、「私」はどちらの側についていいかわからなくなっている。
- ② 河谷君が謝ったのも驚きだったが、田上さんの反応も予想外であり、「私」は事態の進行を受け入れることに困難を感じている。
- ③ 河谷君と田上さんが協力するという展開に、二人の対立を期待していた「私」は、失望を禁じ得ず、放心したようになっていく。
- ④ 河谷君と田上さんが協力するという展開に、二人の対立を期待していた「私」は、自分の心のあり方を見つめさせられている。
- ⑤ 河谷君と田上さん、それぞれがいつの間にか和解に向けて動き始めていたことに、「私」はついつい行けず、疑心暗鬼に陥っている。

第3問 次の文章を読んで、後の問い（問1～3）に答えよ。

そのかへる年の（ア）十月二十五日、（注1）大嘗会の御禊と（イ）ののしるに、初瀬の精進はじめて、その日、京を出づるに、さるべき人々、一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でて行かむも、いともの狂ほしく、流れての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人は、言ひ腹立てど、児どもの親なる人は、「いかにもいかにも、（ウ）心にこそあらめ」とて、言ふに従ひて、出だし立つる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も、いといみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ志を、（エ）さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と思ひ立ちて、その暁に京を出づるに、二条の大路をしも渡りて行くに、先に（注2）御あかし持たせ、供の人々浄衣姿なるを、そこら、棧敷どもに移るとて行きちがふ馬も車も（オ）かち人も、「あれはなぞ。あれはなぞ」と、やすからず言ひおどろき、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。

（注3）良頼の兵衛督と申しし人の家の前を過ぐれば、それ棧敷へ渡りたまふなるべし、門広う押しあけて、人々立てるが、「あれは物詣人なめりな。月日しもこそ世に多かれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の（カ）御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見て、かうこそ思ひ立つべかりけれ」と、まめやかに言ふ人、ひとりぞある。

『更級日記』による

（注） 1 大嘗会の御禊―大嘗会（天皇が即位の後、初めておこなう新嘗祭。一代一度の儀式で、陰暦十一月の中の卯の日におこなわれた）に先立って、賀茂川でおこなわれたみそぎの儀式。

2 御あかし―仏にお供えする御燈明。

3 良頼の兵衛督―藤原良頼。隆家（関白道隆の子）の長男。この時四十五歳。正三位権中納言兼右兵衛督。

問1 傍線部(ア)「十月」の別称を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 霜月                      ② 文月                      ③ 如月                      ④ 神無月                      ⑤ 睦月

問2 傍線部(イ)「ののしる」、(ウ)「心にこそあらめ」、(エ)「さりともおぼしなむ」、(オ)「かち人」、(カ)「御徳」の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ) 、(カ) 。

(イ) ののしる

- ① 恐縮する                      ② 大騒ぎをする                      ③ 悪口を言う                      ④ 評判になる                      ⑤ 不満を言う

(ウ) 心にこそあらめ

- ① お前の思うようにしたらよからう                      ② お前の満足することであるようだ                      ③ 私の心ゆくようにしようと思う
- ④ 私の自由な心のあらわれであろう                      ⑤ いろいろと取り沙汰されるだろう

(エ) さりともおぼしなむ

- ① しかしながら、帝は私の気持ちをわかってくださるにちがいない
- ② そうではあるが、初瀬の仏はあなたの気持ちを汲みとってほしい
- ③ いくらなんでも、仏は殊勝だとお考えくださるだろう
- ④ いくらなんでも、「ともに行く人々」も分かってほしいと思う
- ⑤ それはそうと、「はらからなる人」も理解してくださるにちがいない

(オ) かち人 29

① 牛車に乗った人

② 牛車を引く人

③ 歩いて行く人

④ 祭りに参加した人

⑤ 通りがかりの人

(カ) 御徳 30

① 御利益ごりやく

② 天罰

③ 宝物

④ 土産みやげ

⑤ 供え物

問3 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

① 大嘗会の御禊の日、作者は、初瀬寺詣でのために夜遅く京を出発した。親類縁者は皆、反対したが、良頼の兵衛督の家の者の中に一人だけ、「物詣でなどせずに、このように御禊見物を思い立つべきだ」と、まじめに言う人がいた。

② 大嘗会の御禊の日と初瀬寺詣での日が重なったため、作者は家族と言いつ争いの喧嘩になったが、子どもたちの親である夫の意見で、結局、初瀬寺詣でに行くことになった。その途中で御禊見物もでき、満足した。また、良頼の兵衛督の家の者の中に一人だけ、「物詣でなどせずに、このように御禊見物を思い立つべきだ」と、まじめに言う人がいた。

③ 大嘗会の御禊の日、作者は、初瀬寺詣でのために早朝、京を出発した。家族の中には賛成する者も反対する者もいたが、良頼の兵衛督の家の者の中に一人だけ、「御禊見物などせずに、このように物詣でを思い立つべきだ」と、まじめに言う人がいた。

④ 作者が初瀬寺詣でに出発する日、たまたま大嘗会の御禊と重なって、どちらにするか迷った末に結局、御禊見物への誘惑を断ち切って出かけた。御禊の行列の人たちからはうらやましがられ、また、良頼の兵衛督の家の者の中に一人だけ、「御禊見物などせずに、このように物詣でを思い立つべきだ」と、まじめに言う人がいた。

⑤ 作者が初瀬寺詣でに出発する日は、大嘗会の御禊の日と重なっていた。作者と共に行く人々はいろいろな意見もあったが、少しだけその御禊の儀式に参加して出かけた。また、良頼の兵衛督の家の者の中に一人だけ、「御禊見物などせずに、このように物詣でを思い立つべきだ」と、まじめに言う人がいた。